

領域横断的な「場」づくりによる学際性の実践的研究 ——リベラルアーツ的知への挑戦——

佐藤由紀・下村恭広

1 はじめに

私たちはよく、自身のことを「大学教員」と名乗る。着任当時、私はこの名乗り方に違和感を覚えた。確かに、大学という「教育機関で教育に直接従事する」ため、間違っていない。しかし、私の知る近代日本文学小説の中の「大学の先生」は、自身を「教授」や「助教授」、「助手」などと名乗っており、「大学教員」と名乗っている登場人物はあまりお目にかからない。いつから私たちは自身のことを「大学教員」と名乗るようになったのか。おそらくこの名乗り方は、教育者としての自覚を促す、ないし、そういった自覚が大きいことを端的に示している。もちろんそういった自覚は大切だ。しかし、「大学教員」と名乗ることで、取りこぼれていく何かがあるような気が、私はしていた。

大学に着任してから数年が経ち、大学教員と名乗ることに慣れてきた頃、同じ大学教員の同僚や先輩の専門分野や研究について、その名称以外知らないことに、同時に、私も彼ら/彼女らに自身の研究の話をほとんどしないことに、気づいた。共通する講義や学生らのことを話すことはあっても、同僚や先輩らがどんなことに関心を持ち、人生の中でどう時間を割き、何に知力や体力をかけたわけ、その「専門家」となったのかを、自分が知らないことに愕然とした。

研究は孤独なものである。最終的にその極みへ行き着くためには、誰からの指示/支持なしに、ひとりで道を切り開き、旗を立てねばならない。しかし、孤高に研究をおこなうことと、研究者としての交わりを断つことは全く別のことだ。先人たちと文献で語らうのと同様、すぐそばにいる研究者たちと交わり、お互いの研究を朗らかに話すことは、自身の研究を深化させる。異なる分野や専門であっても、研究者としての自覚と言葉に対する信頼を持って交われれば、お互いの研究への刺激となることを、大学院やその他の研究会の場で強く感じてきた。そこで、大学教員が自分の研究について話をする、研究

者同士としてつながれる場を作りたいと思い、リベラルアーツ学部内の仲間を募り、共同研究として本プロジェクトを始動した。研究者同士が領域横断的につながる「場」が断続的にでも存在することで何が生まれ、どのような地平がみえてきたのか。

本論では、2015年度の有志による活動、および2016年度リベラルアーツ学部内共同研究としての活動を総括、検討する。

2 目的

本研究の目的は二点。一つ目は、リベラルアーツ学部の教員間で、研究者としての交流の場をつくることである。それは必然的に、同業者の交流というより、異分野の研究者の交流の場となる。二つ目は、本学における異分野交流の場の意義と、何が目標となりうるのかについて考察を深めることである。具体的には、異分野交流の場の運営・発展の方法を検討する。

3 活動

2015年度および2016年度の活動について、次の4点に分けて述べる。

1) 研究発表会、2) 読書会、3) 夏季集中研究会、4) 春季集中研究会

1) 研究発表会の開催（以下、敬称略）
（2015年度以前）

- ・第1回学際研究会 2015年3月27日（金）10：00～
[場 所] 大学教育棟会議室
[報告者] 下村恭広 都市社会学
[題 目] 地域産業集団の都市社会—空間構造論
- ・第2回学際研究会 2015年5月21日（木）17：30～
[場 所] 大学教育棟会議室
[報告者] 中田幸司 日本古典文学

所属：リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科

〔題 目〕平安宮廷歌謡をひらく
—隣接領域の和歌とともに

- ・第3回学際研究会 2015年9月24日（木）17：30～
〔場 所〕大学教育棟会議室
〔報告者〕佐藤由紀 生態心理学
〔題 目〕一人芝居の俳優の分析手法についての試論
—ジェスチャー分析の広がりと限界
- ・第4回学際研究会 2015年11月19日（木）17：30～
〔場 所〕大学教育棟会議室
〔報告者〕小山雄一郎 交通社会学
〔題 目〕交通網整備の社会過程を考える
—交通社会学という試み
- ・第5回学際研究会 2016年2月17日（水）13：00～
〔場 所〕大学教育棟会議室
〔報告者〕梶川祥世 発達心理学
〔題 目〕乳幼児期の擬音語理解の発達

(2016年度)

- ・第7回学際研究会 2016年5月19日（木）18：00～
〔場 所〕大学教育棟会議室
〔報告者〕松本由美 第二言語習得論, 文体論
〔題 目〕小学校英語活動における
絵本の活用の可能性
- ・第9回学際研究会 2016年7月28日（木）17：30～
〔場 所〕大学教育棟会議室
〔報告者〕永井悦子 日本語学（日本語史）
〔題 目〕教育資料を活用した日本語研究
- ・第10回学際研究会 2016年12月22日（木）17：30～
〔場 所〕大学教育棟会議室
〔報告者〕村井伸二 (TAP) アドベンチャー教育・スポーツ心理学
〔題 目〕アドベンチャー教育が目指すものとは

2) 読書会

宮野公樹（著）『研究を深める6つの問い』講談社（2015）

- ・第6回学際研究会 2016年4月28日（木）17：30～
〔場 所〕大学教育棟会議室
〔報告者〕佐藤由紀
〔担当箇所〕P.3～P.78「はじめに」「問い1 誰をライバルと想定して研究していますか？」「問い2 あなたの本当の目的はなんですか？」
- ・第8回学際研究会 2016年6月30日（木）17：30～
〔場 所〕大学教育棟会議室
〔報告者〕下村恭広

〔担当箇所〕P.79～P.137「問い3 論文を書こうと思っ
ていませんか？」「問い4 『科学』を盲
信していませんか？」

3) 夏期集中研究会

- ・日 時：2016年9月27日（火）～29日（木）
- ・場 所：京都大学, ハートンホテル京都
- ・参加者：網野公一, 梶川祥世, 勝尾彰仁, 佐藤由紀,
下村恭広, 谷本亮, 中田幸司
- ・スケジュール
(a) 9月27日（火）18:30～20:30 京都大学吉田キャンパス 国際交流セミナーハウスにて開催された
京都大学学際融合教育研究推進センターが開催し
ている「分野横断交流会」に参加。
(b) 9月28日（水）13：00～17：00
ハートンホテル京都 会議室
・13：00～Opening Remarks 佐藤由紀
・13：05～宮野公樹先生（京都大学 学際融合教
育研究センター 准教授）
「大学における“学際性”の意味と意義」
・15：00～共同テーマ研究発表「テーマ：記憶」
中田幸司「〈記憶〉と〈翻訳〉—古典
文学にみる潜在化した和歌」
佐藤由紀「不在の知覚は過去の知覚
か？」
下村恭広「集合的記憶とその空間」
(c) 9月29日（木）10：00～11：30
ハートンホテル京都 会議室
・10：00～共同テーマ研究発表「テーマ：記憶」
谷本 亮「記憶memory」
梶川祥世「親子の共同行動による学習」
勝尾彰仁「記憶の分類とパースペク
ティブ」

4) 春季集中研究会

- ・日 時：2017年3月12日（日）～13日（月）
- ・場 所：近江八幡市, ホテルニューオウミ
- ・参加者：梶川祥世, 佐藤由紀, 下村恭広, 谷本亮,
中田幸司
- ・目 的：異分野交流の媒介としての街歩き
——その可能性の検討と試行
- ・予 定：
(a) 3月12日（日）
・13：00～16：00 近江八幡市旧市街地を中心

とした街歩きの試行

- ・ 17:00 ~ 19:00 『東京人』2014年5月号（都市出版）の「特集 フィールドワーカーになる」掲載の諸論考に関する合同検討会

(b) 3月13日（月）

- ・ 9:00 ~ 13:00 前日の街歩きに関する成果報告会，総括
- ・ 13:00 ~ 16:00 成果報告会を受けた上での，近江八幡市沖島での街歩きの試行

4 成果

4.1 研究発表会の成果

研究発表会を断続的にでも開催することで，以下の二点の成果を見いだすことができた。

1) 研究者としての自覚

大学教員が研究者として交流する「場」を断続的にでも持ち続けることが，参加者たちに研究者としての自覚を刺激し続け，それぞれの研究や研究者としての在り方自体を反省する機会を提供し，新たな研究枠組みを生みだすきっかけとなることが，明確となった。

2) 学部教育資源の開発

互いの研究者としての一面を深く知ることで，講義や演習等の授業を協同する際，その分担内容について一から話をしたり，お互いの理解がすれ違ったままになったままで授業をスタートさせたりするような状態を回避することができた。

当然のことながら私たちは自らの専門領域以外については素人であるほかはない。その意味で，他の「先生」（教員にして研究者）に対面する際の私たちの位置取りは，じつは学生とさほど変わらない。そうした私たちが学生に先駆けて個々の「先生」をよく知ることは，学生に提供できる教育上のコンテンツの開発につながる重要な機会となった。研究発表会は教育を目的とするものではなかったが，学部教育資源を豊かにする結果につながった。

4.2 読書会と夏季集中研究会の成果

読書会では宮野（2015）の読み合わせ，夏季集中研究会では前掲書の著者がコーディネートしている京都大学

学際融合教育研究推進センター「分野横断交流会」の視察，著者を招いての研究会を開いた。これらを通して，学際的異分野交流が求められる背景についての理解が深まり，またそうした理解を踏まえた今後の学際的研究の展望が検討された。

1) 学際的異分野交流の場が求められる背景についての理解

学際的異分野交流の必要性が，本学部にとどまらないより大きな文脈に置きなおして考えられることになった。この文脈について，読書会のテキストであった宮野（2015）に基づきまとめておこう。学際的異分野交流を自覚的に追求しなければならなかった背景には，今日の学界が構造的に学問領域細分化傾向にあり，それが知の普遍性を阻害しているという問題がある。大学と学会によって構築されている学界は，本来であれば人類にとって普遍的なテーマにおける知的探求に資するために，その知的生産体制を発展させ洗練させてきた。しかし今日その洗練は当初の理念から逸脱し，①妄信的個別主義，②論文至上主義，③科学至上主義，といった袋小路をいたずらに深めている。

①妄信的個別主義 細分化された学問領域内での閉じられた問題関心にのみ基づき，より普遍的な問題との関連性に無自覚な研究態度

②論文至上主義 研究評価の過度な定量化を伴う競争激化を背景に論文の効率的生産が追求され，それが言語表現の定型化・陳腐化を招いて普遍的知的探求から疎外される状況

③科学至上主義 学術領域の細分化と研究費獲得の競争激化を背景に，認識の客観性を担保する諸条件について絶えず問い直す余裕が失われ，方法論が固定化・ドグマ化している状況

これらの障害を克服するために研究者に求められているのは，無自覚に前提にしている価値について問い直し，その価値が何に由来しているのか，とりわけ近代産業社会と知識探究の制度化との関係について個々の研究者が自覚し，客観化することである。それを踏まえて，より普遍的な問題追求に資する知的生産の体制を作り出さなければならない。

付論：学術領域の細分化と「新しいリベラルアーツ」

上記のような現状認識は、吉見（2011）による近代の大学理念の検討によれば、リベラルアーツの再評価の背景にも通じる。大学と呼ばれる高等教育研究機関は中世までさかのぼることができるが、近代における大学の理念は、19世紀ドイツで確立した大学像、一般的にフンボルト的大学モデルと呼ばれるものである。フンボルト的大学の特徴は次の三点に整理できる。

- ①研究と教育の統合：大学は、既に知っていることの伝達だけではなく、新しい知識の獲得、知識を進歩させる技法の伝達でなければならない。
- ②国民国家との結びつき：近代の大学は国家（およびそれと制度的補完関係にある資本主義市場経済）の知的資源の供給源として、国家の全面的な支援を受けて設立された。
- ③「理性の自由」：

この三点目について。大学は国民国家や資本主義的市場経済と結びついているがゆえに、そこでの知的活動には社会的実用性が求められる。しかし、知が有用であり続けるためには同時に、そうした実用性の評価基準そのものや、それが依って立つ価値判断について絶えず批判的に吟味する契機——ドイツでは「理性の自由」（カント「諸学部への争い」）に、英語圏では「リベラルな知」（ニューマン『大学の理念』）に期待されていたこと——を自らに内包しなければならない。そうした契機は、国家や産業界の要請から自律してこそ保つことができる。このように実用的な知と「理性の自由」とが対立しながらひとつの場に統合されていることこそが、近代の大学理念の核心であった。

他方、このような「理性の自由」や「リベラルな知」はいわゆる「教養」と呼ばれるものでもある。教育の場としての大学には、「教養」による人格の陶冶を経て、諸学の成果を統合的に理解する自律的な主体の育成が期待された。今大きく問われているのは、この理念にほかならない。「リベラルアーツ」という中世的概念は、まさにこの局面で再浮上している。

「しかし私たちが今日直面しているのは、そのような『大学の理念』の限界、近代的大学のリベラルな知が、複雑に巨大化した専門知の氾濫のなかで、『古典』という以上の価値を見出されなくなってしまった状況である。／このような状況で必要なのは、

『古典』や『教養』を復活させるのではない仕方であり、リベラルな知を追究していくことであるように私には思われる。専門知と対立し、それと隔絶する次元にリベラルアーツを『復興』するのではなく、高度に細分化され、総合的な見通しを失った専門知を結び合わせ、それらに新たな認識の地平を与えることで相対化する、新しいタイプのリベラルアーツへの想像力が必要なのだ」(吉見2011: 21, 強調は引用者)

この「新しいタイプのリベラルアーツ」と学際性についての内的連関は、さらに検討が必要であろう。

「かつて発見・発明・開発の知は、人類の外部、まだ発見されていない未開拓のフロンティアが存に残っていた時代には、世界を拡張し、未来を創造する基軸とされてきた。そのような発見・発明の技術を使って、西洋近代のまなざしは地球上の、宇宙の、さらにはミクロの外部に向けて拡張されてきた。しかし今日、多くの分野で知の飽和化が進んでくると、すでに膨張した既知の諸要素は、互いに矛盾し、衝突し、問題を発生させながら拡散していく。次世代の専門知に求められているのは、まったく新しい発見・開発をしていくという以上に、すでに飽和しかけている知識の矛盾する諸要素を調停し、望ましき秩序に向けて総合化するマネジメントの知である。このような専門知を発達させるには、既存分野の枠内に異分野の諸要素を取り込むようなやり方ではだめで、そうした枠を超えて新たな専門知を創出していく必要がある。それと同時に、近代国民国家と連動してきた『教養』ではなく、むしろ中世の『自由学芸』に近い新たな横断的な知の再構造化が、ここに要請されてくるはずである」(吉見2011: 243-4, 強調は引用者)

2) 学際的異分野交流の場の運営手法の理解

夏季集中研究会で京都大学学際融合教育研究推進センターの取り組みを視察して得た知見をまとめる。このセンターそのものはきわめて小規模で、研究者間の連携の仕組みづくり、場づくり、情報発信に特化している。研究や教育を担わず、純粋に「分野横断」事業に特化している。主な取り組みは以下の通りである。

①ユニットの創発と研究支援

ユニットとは、全学的・分野横断的な研究プロジェ

クトで、予算配分と一体化した部局編成から自由な研究者グループである。いわば、学生のサークルのような形で生まれるユニットが、外部資金を獲得したり他機関と公式に協定を結ぶ際、大学公認の部活動としてセンターが認定し、バックアップしていくのである。

②分野横断交流会

研究者同士の自発的で定期的な交流会（毎月最終火曜日夜）。簡単な立食パーティーの形式の懇談会。学外からも参加可能で、私たちもここに参加した。

③学際研究着想コンテスト

分野横断的な研究者の育成を企図した、研究テーマの発表会とそれに対する助成。

こうした取り組みに通底している発想は、次のようなものである。異なる分野の研究者が同じテーブルにつけば異分野融合が生じるわけではない。また、異分野融合は政策担当者や管理者が主導して実現できるものでもない。「操作的ではない感情的な信頼関係で成り立つメンバーに任せきることが大事である」（京都大学学際融合教育研究推進センター 2015: 71）。中央官庁主導で続いてきた大学改革が、無定見な「選択と集中」に基づく競争主義で研究を蝕んでいるなか、操作主義や近視眼的業績主義とは異なる論理で場の運営がこころがけられている。

センターは大学全体の横断的組織であり、これらの組織運用のスタイルをそのまま本共同研究に適用することはできない。しかし、運用の原理や交流の場を作り出す姿勢については、参考となるところが多かった。とりわけ、既存部局の枠組みからの距離、参加者の自発性に基づく運用、長期的視点に基づく定期的交流の継続、企画者が交流のファシリテーション的技法について自覚的であること、などに学ぶべき点が大きい。

4.3 春季集中研究会の成果

春季集中研究会では、京都大学学際融合教育研究推進センターがおこなっている、各専門分野を超えた「ユニットの創発」の方法を参考にし、そもそも多様な専門性を持つリベラルアーツ学部教員間で異分野交流をおこなうための手法の開発を試みた。具体的には、日常的目的から離れた視点で都市を歩き、観察する営みを、仮に「街歩き」と称し、そのような意味での街歩きを、異分野交流の媒介として位置づけ、その可能性を探った。

1) 学際的異分野交流の可能性の検討

夏期集中研究会では「記憶」をテーマに、各参加者が

自身の専門分野を通して、その意味に迫るという異分野交流を試みた。記憶かんする多角的な視点や意味が明らかになり、その意義は十分に認められたが、一方で、その交流方法は学会等でおこなわれるシンポジウムに近いものであった。そこで、春季集中研究会では、お互いの専門分野を飛び出すような異分野交流として「街歩き」をおこなった。

まず、参加者内の「共通言語」を探るため、春季集中研究会前に「フィールドワーカー」を特集していた『東京人』2014年5月号（都市出版）を配付し、各参加者が興味をもった記事をまとめてくる、という課題を課した。また街歩きの方法は各人に任せるが、必ずカメラを身につけ、写真を一定枚数以上撮影する、という枠組みを提示した。対象地は、参加者らが誰も馴染みはないが、名前は聞いたことがある「一定の距離感」をもった「都市」を選択した。

研究会一日目は、まず1時間ほど参加者全員で近江八幡市旧市街地の中心部を歩き、街の概要をつかんだ後、午後に2時間程度各人で街歩きをおこなった。夕方、『東京人』2014年5月号（都市出版）の「フィールドワーカー」にかんする諸論考の検討をおこない、街歩きの方法と意味について議論をおこなった。研究会二日目は、前日おこなった自身の街歩きについての報告をおこなった。その後、近江八幡市旧市街地である「都市」との比較対象地として、同市沖島にて街歩きをおこなった。

「街を観察する」という点では、生物学者の谷本と都市社会学者の下村はその手法をある程度身につけていたが、日本古典文学者の中田、心理学者の梶川、佐藤はその手法も含め、手探りしながらのアマチュア的観察となった。枠組みをもった前者の二名の観察報告と枠組みを生みださなくてはいけない後者の三名の観察報告は、洗練さという点では異なりが現れた。しかし意外なことに、観察から導き出した街の「形相」は共通している部分があり、そこから創発的な議論を展開することができた。街歩きの手法を示した論考を事前にまとめ、街歩きに対するイメージないし枠組みを各人持つことが出来たことが、「街を観察する」ことの共通の構えを作り出すことへつながった。

2) 学際的異分野交流の限界を超えるために

異分野交流を主体とした街歩きは、その「目的」を設定しなかったことで、議論を深めていくための方向性を見失うこととなった。近江八幡市旧市街を各自が歩いたことで見えてきた「近江八幡市旧市街らしさ」を提示し、

羅列し、お互いの共通点や「みえ」の差異を述べ、異邦人から見た「その街らしさ」を考察することはできた。しかし、それ以上に議論を深めていくためには、研究者として「共通の問い」を持つことが必要だ、ということがみえてきた。

研究をおこなう際に「問い」を持つことは「当たり前」なことであり、街歩きをする以前に「共通の問い」を設定しなかったこと自体が、研究設計のミスだという指摘もあるかもしれない。しかし、この「当たり前」という考えは、学際的研究にとっては危険なものである。各専門分野にとっての「当たり前」をそれぞれが主張しはじめることは、宮野（2015）が指摘していた「個別的盲信主義」に陥り、結局は交流の糸口をつかむことができない。まずは素朴なアイデアから異分野交流を実施し、そこからみえてきた限界を手がかりに、次の異分野交流の段階へと移っていく。大きな山も一步一步歩いて踏破するように、学際的研究は探索的におこなっていくしかない、ということも一つの発見となった。

4.4 全体をふりかえって——集学的研究から学際的研究へ

本共同研究を探索的に運営してみた結果、異なる専門分野の大学教員が研究者として交流することには、①研究発表の場としての次元、②集学的研究の場としての次元、③学際研究の場としての次元、の三つの次元があるようだ、ということがわかってきた。

①研究発表の場

第一には、お互いの研究を披露し意見を交わす、という次元だ。本共同研究がおこなってきた「研究者同士が領域横断的につながる『場』づくり」がこれにあたる。この次元はおそらく、従来の学会でおこなわれてきたこととあまり変わらない。ただし、その場に参加している研究者の背景がそれぞれ異なるということは、本研究会と学会の大きな違いである。異なる専門領域の研究者が、それぞれの視点から知識やアイデアを発表者に提供することで、発表者自身が思ってもみなかった、発想の破れとでも言うようなひらめきが生まれる瞬間を毎回のよう目撃した。これは本共同研究の大きな成果の一つといってもいいだろう。

②集学的研究の場

交流の第二の次元は、一定期間、あるテーマに寄り添う形で、それぞれの研究者が自身の知恵や知識を提供し、その多面的視点を生かして、そのテーマに対して新たな

気づきを生みだそうとする「集学的研究 Multidisciplinary Research（京都大学学際融合教育研究推進センター、2015）」というものだ。本年度、京都でおこなった「記憶」をテーマにした夏期集中研究会が、この次元にあたるものになるだろう。本年度、こういった試みを初めておこない、記憶という言葉が示唆する深さを改めて発見し、創造的な研究への手がかりを得ることができた一方で、それぞれが専門分野に留まったまま言葉を交わすことの限界も顕わになった。

③学際研究の場

第三の次元が、「学際研究 Interdisciplinary Research（京都大学学際融合教育研究推進センター、2015）」である。「学際研究」を成立させるためには、研究者がそれぞれの専門の枠を維持したまま集まるだけにとどまってはならない。むしろ異分野との交流や共同作業を通じて、それぞれの研究が普遍的観点から更新されるような過程が望ましい。つまり、従来の研究のお作法をいったん忘れなければならないようだ、ということが、本年度第二の次元を経験し見えてきたことだ。

従来の研究スタイルのほとんどは、それぞれの研究者がそれぞれの研究室の中でこつこつと知識を貯め、実験をおこない、データを睨み、思考を深め、その結果を披露する。比喩的に言えば、「料理人が厨房に立てこもって腕によりをかけ、仕上げた料理を食卓に運んで、『どうぞ味わってください』というやり方だ。その料理法となる分析や思考過程は秘伝であり、結果としての料理だけで評価を受ける。しかし、「学際研究」はその料理法やその料理哲学、つまり、それぞれの学問分野の方法論や価値観をあげすけに公開し、その差異を知るところから始めなければならない。残念ながら、本共同研究ではまだそういう意味での「学際研究」が成立しているとは言い難い。

5 今後の課題と活動予定

5.1 これまでの実践の継続

研究発表の場の継続：研究会の基盤となる場として継続する。京大学際融合教育研究推進センターの取り組みと同様、枠組みを維持して繰り返すことに意味があると考ええる。

共同テーマを設定した研究交流：これも基本的な枠組みは継続する。ただし、2016年度の経験を踏まえ、来

年度はテーマ設定やセッションの開き方についてより工夫をこらすことを試みる。

5.2 新しい試み——様々な分野の研究者がいることの創発性を、手軽に味わえることをめざして

1) 目的

先述のように、中長期的展望としては集学的研究から学際的研究への展開を目指したい。とはいえ、一足飛びに学際的研究の段階を実現することは非現実的である。現在のような研究報告会を継続しつつ、集学的研究から学際的研究へ至る細かい諸段階を模索しながら進むべきではないか。

ただでさえ研究に割けるリソースが少ない中、個々の研究者が現在追求している課題と同じモチベーションで時間を割けるような——あるいは、それでも時間を割きたいと思えるような魅力的な——共同研究のテーマをいきなり設定することは難しい。

さしあたっては、すぐにアウトプットへ直結するとは限らないが研究上の価値を見出せるような場を、日常業務と平行して関われるよう、参加者にとって低コストで——あまり準備せずに参加でき、発言の責任が軽くて済む、という意味だが——催すことを目指す。

そこで、昨年度の「記憶」をめぐるセッションとは異なる形式のコミュニケーションの場を、(将来的には異分野融合的な研究がそこから生まれることを期待しつつ)現時点では研究とは異なる質のコミットメントを促す場として実現させたい。「研究とは異なる質のコミットメント」とは、「遊び」と言い換えても良い。大学教員にとって研究は職能の基盤のひとつを成していて、いわゆる「プロ」としての関与を求められる。しかし知的好奇心に基づいた活動全般について思い浮かべれば、それらが職能としてのみ実現されるという想定は非現実的だろう。そこにはどこか、遊びの要素が含まれているはずだ。この遊びの要素を、異分野交流の媒介項として自覚的に育てられないだろうか。

2) 手法

以上の具体的な実施形態について考えてみると、来年度異分野交流の媒介として取り入れたいのは、どの参加者にとっても自分の専門領域から遠いテーマについて、遊びとして、アマチュアとして関わる実践である。具体的には、①文芸批評、②街歩き、の二点を検討している。

①文芸批評

ここでいう文芸批評とは、何らかの芸術作品の解釈、それをめぐる対話のことである。何らかの芸術作品をめぐる議論は、専門家による仕事としてこなしている方もおられる一方、遊びとして楽しむことも可能である。しかし同時に、それを通じて思わぬ形でそれぞれの専門の研究で培われた知見が転用される可能性も期待してよいだろう。

そこで、どの参加者にとっても専門外の領域の作品について合同鑑賞会を開き、共同討議を試みる。音楽、舞台芸術、造形芸術、文学、マンガ、映画、等々様々なジャンルの作品をネタにしようが、現時点で専門家不在の領域として選ぶと、映画が妥当かもしれない。映画であれば、DVDを用いて合同鑑賞会を開き、上映終了後一定の時間をとって感想を言い合うことぐらいは可能であろう。

ただしこの場合、どのような作品を選択するかが問われる。カルト的な作品や先端的過ぎる作品を除き、かといって解釈の幅が狭くなってしまう娯楽作品でもないものが望ましい。現在検討しているのは、昨年公開された『シン・ゴジラ』(庵野秀明監督、東宝)である。

②街歩き

都市での移動は普通、私的・公的な用件のためになされるが、こうした日常的な目的から離れた視点で都市を歩き、観察する営みを、仮に「街歩き」と総称しておきたい。

街歩きを異分野交流の媒介として期待する理由は、すでに街歩きが学術的調査にとどまらず、観光、芸術表現、テレビ番組など、きわめて広範囲な領域に広がっているからだ。学問的関心に根差した街歩きは、初歩的なフィールドワークとしてあるいは「巡検」として諸種の都市研究において既に定着しているもので、一見無秩序に見える都市空間に一定のパターンを見出そうとする視点である。その典型例は、建築史家の陣内秀信による「空間人類学」である⁽⁴⁾。地形に応じた土地利用のパターンとその歴史的推移に関する陣内の読み解きは卓越しており、実際に東京の旧市街地を歩けば今なお説得力を持っていることに気づく。

街歩きには他方で、学術的観察から逸脱する要素の豊かな系譜もある。都市空間の隠れた秩序を発見しようとする観察からは取りこぼされるもの、つまり意味の分からない痕跡、廃墟、機能を失って放置された細部を見出す視線である。これは考現学から路上観察学への展開の

中で育まれた発想⁽⁵⁾で、赤瀬川（1987）における「純粹階段」（右図）が典型だ。「普段は見過ごされがちな目の前にある状況にあらためて価値を見出し、豊かな意味を孕んだ現象として捉え、差し出す行為自体が、ひとつの表現として強度を備えていること」（松岡2013: 13.）が重視され、作品の制作を基点に置く「芸術」の捉え方そのものの揺さぶりとして注目された。

以上のような街歩きは、かつては学者や芸術家の特権的な振る舞いという側面も持っていた。しかし現在、街歩きに固有の発想、視点、手法は大衆化している。その一端は、テレビで今世紀に入ってから目立つようになった「ご近所散歩番組」⁽⁶⁾に見ることができる（尾関2014）。これらの番組は基本的には徒歩や公共交通での移動に基づき、歩いてこそ感じられることやその視線で分かる情報について、事前調査と行き当たりばったりの展開とを組み合わせた演出で提示している。こうした番組の受容は、『東京人』『散歩の達人』といった雑誌メディアによる開拓で視聴者の関心がある程度地ならしされていたことや、写真機とGPSを一体化して持ち運べる携帯端末、コンビニの普及、など街歩きのインフラストラクチャーの整備といった要因があると推測される。

このように街歩きは、特定の学問領域に回収されることのない、あるいはそもそも学問に限定されることのない雑種性を持った観察行為である。また、誰にとってもアマチュアであることを強えられる、遊戯的要素が強い振る舞いでもある。とはいえ、そこには様々な学問分野や芸術表現からの影響が入りこみ、また潜在的には新しい知的探求への通路が開かれている。街歩きが持っているこうした特性を異分野交流に活用するためには、観察の枠組みはどの程度共有して実施すべきなのか。記録の取り方やアウトプットの形式に何か共通フォーマットは必要か。こうした段取りを検討しながら、任意の都市を対象とした街歩きを実践し、その可能性を検討したい。

さらに街歩きの実践は、リベラルアーツ学部新入生を対象に一泊二日の研修行事として実施されている「箱根研修」のバージョンアップを図る場にもなるだろう。箱根研修は箱根をテーマとした街歩きとしての側面を持っている。しかし、始まった当初と比べると開催日の曜日変更に伴ってインタビューなどインテンシブな手法による現地調査には、年々制約が大きくなりつつある。限られた時間で特定の場所を、限られた観察手法を用いて、何らかの発見とそこで得た知見をひとまとまりの表現に高めていく。こうした目標を学生が追求するためには、どのような課題提示の仕方が効果的なのか、検討の余地

が大きい。街歩きについて教員自らが経験を重ねることで、新しい手法の開発につながることを期待される。

注

- (1) 『新明解 第六版』の「きょういん【教員】」の項目は、「[職員・事務員と違って] 学校と名の付く教育機関で教育に直接従事する人」となっている。一方、「きょうじゅ【教授】」は「①学問・技芸を一定の順序で教えること（人）②[大学や高等専門学校などで] 教育や研究に従事する人の中で、最上の職階」となっている。ちなみに、「大学教員」という項目は掲載されていない。
- (2) 2015年度当時の、本共同研究の立ち上げメンバーは以下の通りである。
梶川祥世（発達心理学）、勝尾彰仁（科学教育、インフォーマルラーニング）、佐藤由紀（研究代表者／生態心理学）、下村恭広（都市社会学）、小山雄一郎（交通社会学）、谷本亮（栽培学、植物繁殖学）、永井悦子（日本語学）、中田幸司（日本古典文学）、藤澤眞理（声楽）、松本由美（第二言語習得論、文体論）。
- (3) ホイジンガ（1971）が遊びについて、「利害関係を離れたもの」と性格規定している点が参考になる。しかしそれは、一切の利害関心に関わらない行為という意味ではない。むしろ重要なのは、遊びが日常生活から時間的・空間的に切り離され、固有の論理や規則を内包した活動領域を成り立たせ、そこでの行為が「その行為そのものの中で満足を得ようとして行われる」ようになる点である。遊びで求められる満足は、日常生活の利害関心とは異なる質の利害関心を生み出す。「すべての研究者が力点を置いているのは、遊戯は利害関係を離れたものである、という性格である。〈日常生活〉とは別のあるものとして、遊戯は必要や欲望の直接的満足のいう過程の外にある。いや、それはこの欲望の過程を一時的に中断する。それはそういう過程の合間に、一時的行為としてさし挿まれる。遊戯はそれだけで完結している行為であり、その行為そのものの中で満足を得ようとして行われる」（ホイジンガ1971: 24. 傍点は原文）
- (4) 「都市は様々な要素が集まって組み立てられている。しかし、建物にしても道にしても決してばらばらということではなく、ある文法によって構造化され、文脈をもって並んでいる。したがって手順を追って読んでゆけば、都市は決して難解なものではない。東京の場合、その個性を演出している根底の文脈は、豊かな地形の上に展開した壮大な城下町江戸の建設とともにあらたな形づくられたといえる。だからこそ、混とんとして目に映る現在の東京のなかに空間的骨格を見出すためにも、このように実際に自分の足であるき、地形とその上に歴史的に成立した土地利用のあり方を体で感じながら『都市を読む』ことが最も有効な方法となるのである」（陣内1992: 23.）。
- (5) 路上観察学派については、ダダやシュルレアリスムとの関係を整理する必要があるかもしれない。「シュルレア

リストは予期できない感情や出来事に自分自身を開いておくことが重要であるとして、街路や市場をランダムに遊歩しながら、無意識と狂気の解放によって意識の次元を揺さぶろうとした。ルイ・アラゴンは『パリの農夫』（1926年）において、カフェのドリンク・メニューや目に映ったサイン、貼紙、街路の一時的な光景、さらには撤廃の危機に瀕したパサージュの建物などを詳細に記述した」（南後 2006: 56）。

（6）『ぶらり途中下車の旅』（日本テレビ1992年～）、『ちい散歩』（テレビ朝日2006年～）、『もやもやさまぁ〜ず2』（テレビ東京2007年～）、『プラタモリ』（NHK 2009年～）など。

引用文献

赤瀬川 原平 1987『超芸術トマソン』（ちくま文庫）筑摩書房
尾関 憲一 2014「大散歩時代の到来——“世界”から“ご近所”へ向かうテレビ。」『東京人』 339: 72-7.
京都大学学際融合教育研究推進センター 2015『異分野融合、実践と思想のあいだ。』京都大学学際融合教育研究推進センター

小森田 秋夫 2005「東京大学社会科学研究所主催シンポジウム『希望学宣言！』開会の挨拶」（2005.07.15.）<http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope-archive/declaration/doc/opening.pdf>（2017.02.06取得）

陣内 秀信 1992『東京の空間人類学』（ちくま学芸文庫）筑摩書房

南後 由和 2006「シチュアショニスト——漂流と心理地理学」加藤政洋・大城直樹編著『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房

ホイジンガ、ヨハン 1971『ホモ・ルーデンス——人類文化と遊戯』（高橋英夫訳）中央公論社

松岡 剛 2013「観察者たちがもたらすもの」広島市現代美術館『路上と観察をめぐる表現史——考現学の「現在」』フィルムアート社

宮野 公樹 2015『研究を深める6つの問い——「科学」の転換期における研究者思考』講談社

吉見 俊哉 2011『大学とは何か』岩波書店

（さとう ゆき／しもむら やすひろ）